

松嶋夜話 卷之下 57

〔原文〕廿七日廣田檀那爲薦亡設齋供養

〔訓読〕廿七日、廣田の檀那薦亡の爲に齋を設け供養す

〔原文〕悉焼香

〔訓読〕悉く香を焼く

〔原文〕晌午應千葉三友茶

〔訓読〕晌午、千葉の三友の茶に應ず

※千葉三友…よくわかりません

〔原文〕壁上掛雪村鷹繪

※雪村（明応元年（1492年）？ - 天正17年（1589年）頃）…室町時代後期・戦国時代の画

僧で、水墨画を描いた。雪村周継とも称し、諱、別号として如圭、鶴船老人などがある。

〔原文〕見之太醒皆目矣

〔訓読〕之を見るに、太だ皆目を醒む

〔原文〕不世之画也

〔訓読〕世ならずの画なり

〔原文〕弗於時尚筆者所覃

〔訓読〕時尚の筆者の覃ぶ所にあらず

〔原文〕何夫如斯也

〔訓読〕何ぞ夫れ斯の如くなりや

〔原文〕復有一子乞名其字

〔訓読〕復た一子有り、其の字を名づけられんことを乞う

〔原文〕余因紙上以三省字大書

〔訓読〕余因りて紙上に三省の字を以て大書す

〔原文〕下題五字曰

〔訓読〕下に五字を題して曰はく

〔原文〕三友有家器

〔訓読〕三友に家器有り

〔原文〕席上請其名

〔訓読〕席上に其の名を請う

〔原文〕三省吾身者不差孔老情

〔訓読〕三たび吾が身を省みる者は孔老の情に羞じず

〔原文〕又持画七聖賢爲七福神圖樣者一軸

〔訓読〕七聖賢を画きて七福神の圖を爲す者の一軸を持って

〔原文〕來乞贊

〔訓読〕来たりて贊を乞ふ

〔原文〕余走筆曰

〔訓読〕余筆を走らせて曰はく

〔原文〕三皇二帝孔老周公成徳成福

〔訓読〕三皇二帝孔老周公徳を成し福を成す

〔原文〕七福德翁主人供仙庖

〔訓読〕七福德翁、主人仙庖を供す

〔原文〕點止從夫登觀音山

〔訓読〕點止め、夫れ從り觀音山に登る

〔原文〕下山赴于志田之館

〔訓読〕山を下りて志田の館に赴く

〔原文〕先登竹樓

〔訓読〕先ず竹樓に登る

〔原文〕亭主持遮眼一棹來

〔訓読〕亭主眼を遮る一棹を持ちて來たる

〔原文〕目之望遠海

〔訓読〕之を目にして遠海を望めば

〔原文〕唐桑明神之山如採于手

〔訓読〕唐桑の明神の山、手に採るが如し

〔原文〕供茶果

〔訓読〕茶果を供す

〔原文〕又降竹樓入正室

〔訓読〕又た竹樓に降りて正室に入る

〔原文〕壁上掛唐繪三幅

〔訓読〕壁上に唐の繪三幅を掛く

〔原文〕淡彩骨法筆意可觀

〔訓読〕淡彩骨法、筆意觀るべし

〔原文〕又旁釘古法眼光信鳥鵲之画

〔訓読〕又旁らに古法眼の光信の鳥鵲の画を釘す

※古法眼…父子ともに法眼に補せられた時、その区別をするために父をさしている称。特に狩野元信をいう。

〔原文〕大画也

〔訓読〕大画なり

〔原文〕筆勢遒勁

〔訓読〕筆勢遒勁す

〔原文〕非可言伸也

〔訓読〕言の伸ぶべきに非ず

〔原文〕軸下攸飾花尊笔硯几屏等非凡物

〔訓読〕軸下の飾る攸の花尊、筆、硯、几、屏等、非凡に非ず

〔原文〕悉唐山調度也

〔訓読〕悉く唐山の調度なり

〔原文〕是日去而可求于四夷者乎

〔訓読〕是れ去りて四夷に求むべしと曰ふ者なり

〔原文〕復款待之餘備甌浴室請余

〔訓読〕復た款待の餘、甌浴室を備え、余に請ふ

〔原文〕余以下廻上實不須浴

〔訓読〕余、下廻上實、浴を須（もちい）らずを以て

〔原文〕諸子執葵扇

〔訓読〕諸子葵扇を執って

〔原文〕入于甌浴饗浴罷退于寺

〔訓読〕甌浴に入りて、饗浴罷め、寺に退く